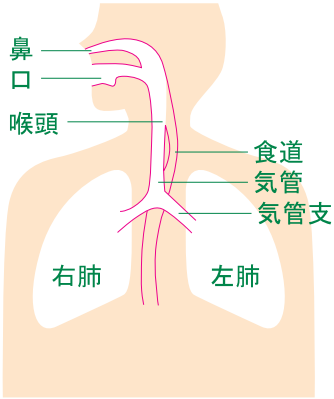
Ⅲ わが国に多い５大がん －その2－

「肺がん」



気管・気管支、肺胞などに生じる悪性腫瘍

呼吸によって吸い込まれた空気は、気管・気管支を通り、肺の奥にある肺胞という場所に到達し、空気中の酸素と血液中の二酸化炭素が交換されます。肺がんは、この気管・気管支や肺胞の一部の細胞から生じる悪性腫瘍です。

肺がんの一般的な症状は、治りにくい咳、血痰、呼吸困難、発熱、胸痛などですが、どれも肺がんに特有の症状ではありません。また進行の程度にかかわらず無症状ということもあります。

喫煙は肺がんの最大の危険因子です

肺がんは喫煙との関連が深いがんです。喫煙者が肺がんになる危険性は、非喫煙者の10～20倍程度高いとされています。また、喫煙開始年齢が若いほど、喫煙量が多いほど、肺がん発生の危険性が高くなります。（1日の喫煙本数×喫煙した年数、が600以上）しかし、喫煙者が禁煙すると、喫煙を続けた場合に比べ、肺がんの危険性は低下します。

なお、受動喫煙、つまり喫煙者の周囲の人が、無関係にタバコの煙にさらされ吸入した場合でも、危険性は高くなります。

肺がんの分類は、大きく２つ

がんの性質や、治療方法、治療効果が異なるため、肺がんは、大きく二つに分類されます。

そのひとつ非小細胞肺がんは、肺がんの約80～85%を占め、さらに腺がん、扁平上皮がん、大細胞がんなどに分類されます。

もうひとつの小細胞がんは、肺がんの約15～20%を占め、増殖が速く、転移しやすいがんですが、非小細胞がんと比べて抗がん剤の効果が高いため、抗がん剤治療が中心となります。

治療方法は手術療法、放射線治療、抗がん剤治療を組み合わせて行います

治療は、肺がんの分類（非小細胞肺がん、小細胞肺がん）と病期（※1）に基づいて、また、患者さんの全身状態、年齢、心臓・肺機能などを考慮しながら、手術療法、放射線治療、抗がん剤治療（化学療法）を組み合わせて行います。

最近では、分子標的治療薬という、がんの増殖や転移などにかかわっている、がん細胞の分子を標的とした、新しい抗がん剤が使用されることもあります。

※1
病期とは、がんの進行の程度を表す言葉で、ステージとも言われます。がんの大きさや広がりの程度、リンパ節や他の臓器への転移などによって、病期が決められます。病期を知ることで、病気の程度に応じた、より良い治療法の選択が可能になります。